

論文審査の結果の要旨

氏名 渡邊(前川) 美湖

本論文は、開発援助における「援助協調」、特に、国連機関間の援助協調の実効性を高めるための、分析と実践的な処方箋を提示することを目的としている。協調、競争、協力がもたらす援助効果への影響について、事例研究を用いて分析、検証し、国連での制度設計への示唆と提言を行っている。全 8 章から構成されその概要は以下に記す通りである。

第 1 章では、序論として、本研究の背景、目的、概要について述べている。本研究の背景として、1960年代以降、政府開発援助（ODA）を拠出する政府機関や国際機関等の増加により、限られた行政能力しか持たない途上国政府が多種多様な援助プログラム実施に伴う行政負担に十分に対処できず、「取引費用」（transaction cost）がかさみ、援助活動が非効率的になっているという指摘が、モースなどによりなされた。特にこの現象は、アフリカ諸国で顕著に見られたことが指摘されている。

第 2 章では、先行研究と援助協調の現在に至るまでの国際的な潮流と取り組みについて概観している。援助に関わる「取引費用」やニュー・パブリック・マネジメントを適応した開発援助における実施や評価の手法に関する学術研究や実践的分析等に関して記述されている。1990年代以降、被援助国、各国援助機関や国際機関が、経済協力開発機構の開発援助委員会（OECD-DAC）の場を中心に「援助協調」の具体的指針と対応策について議論・検討してきた経緯や国連における援助協調を促進するための取り組みに関する分析が行われている。

第 3 章では、研究方法の詳細が述べられている。本研究では、事例研究に関する定性的な分析が行われた。開発のフェーズの異なる以下の 3 つの事例を通じて、援助協調の実効性を高め開発効果を向上させる（もしくは低下させる）メカニズムと政策的な対処について分析を行った。援助協調を促進し、開発効果を向上させるために、組織間関係を「協調(Coordination)」、「競争(Competition)」、「協力(Cooperation)」の「3Cs」という枠

組みで捉え、事例解析を行っている。プロジェクト管理の工程の中で 3Cs を有機的に展開させることで、援助協調が開発効果に有意に貢献し得ることを「3Cs ダイアグラム」を用いて実証的に分析している。定性的分析手法を用い、文献調査、参与観察、関係者（約 130 名）へのインタビューによってデータの収集と分析が為されている。

第 4～6 章では事例研究を取り上げている。第 4 章では、中国における国連機関の援助協調、特に 1997 年以降の国連改革の流れの中で実施された国連コーディネーションの成果と課題を分析するため、「国連機関が実施した HIV／エイズ対策への取り組み」に関して、第 5 章では「ルワンダの開発・復興期における貧困削減戦略書 (PRPS) の作成と実施を通じた援助協調の取り組み」に関して、第 6 章では「ルワンダでの紛争後支援における援助協調」について分析・検証している。これらの事例研究から、援助協調における効果的な組織間関係（「協調」、「競争」、「協力」）はプロジェクト・サイクルによって異なるのではないかという仮説の妥当性が検証された。

第 7 章では、3Cs を用いた事例研究の成果とそれに基づく政策提言が行われている。プロジェクト・サイクルの「計画、予算獲得」の段階では、国連機関間で一定のルールに基づく「競争」を行うことにより、プロジェクトの質の向上、被援助国政府のオプションの拡大、効率の改善などの側面をポジティブな結果が観察された。プロジェクト・サイクルの「実施」の段階では、「協調」が必要であり、開発効果の向上に有効に寄与する局面があることが判明した。プロジェクト・サイクルの「モニタリング・評価」や「政策対話、アドボカシー」活動においては、組織間の「協力」がより促進されるべきだという結論が導かれた。また、「協調」が有意に機能するための「競争」の役割について検証され、3Cs の相互関係についても分析が為されている。

第 8 章では、研究から得られた結論が述べられている。

なお、本論文第 6 章は、Annette Lanjouw、Eugène Rutagarama、Douglas Sharp との共同研究に基づき分析を行っているが、論文提出者が主体となって新たな分析および検証を行ったもので、論文提出者の寄与が十分であると判断する。

したがって、博士（国際協力学）の学位を授与できると認める。